

## (5) 小菌の場合

### 「目標達成」

目覚めてすぐに凍らしておいた飲み水を取り出そうと、冷凍庫の引き出しをガタンと開けた。透明だった水が、ペットボトルの底の方からみるみる白く変わっていった。過冷却現象である。今回はうまくいきそうな気がしてきた。これまで仰々しく準備をしたときに限って天候不良や波の影響で、第一の目的であるハミヤ島や周辺の無人島ですら近寄れない本研修が何回も続いている。そのため今回は、前もって準備することなく、当日の朝準備することにした。バタバタとするであろうが、とっさに素早く忘れ物が無いように身支度を整えるのも大事な訓練だと言い聞かせ当日を迎えた。ダッフルバックに必要な道具、着替え、食材を投げ込み玄関を出た。大冨先生と合流し軽バンに荷物を積み込み出発した。

自宅近くの商店前にある氷の自動販売機で、食材冷却用の氷を買った。氷の自販機からクーラーボックスに氷を移す際、いくつか氷が歩道に落ちたが、大冨先生が何のためらいもなく拾い上げ、口に放り込んだ。氷のせいでモゴモゴとではあったが、高専時代の寮の製氷機の思い出と、今回の計画を聞いた。今回も外海の波が高いらしく、ハミヤ島は無理らしい。クーラーボックスを積み込み、不承不承といった感じで集合場所の学校へと軽バンを走らせた。学校で全員と合流し、飯山先生の車に荷物を積みかえ古仁屋港を目指した。

古仁屋港近くの公園で昼食を済ませ古仁屋港を出港した。しばらくして、ヘルム・ステーションに上り船長の隣に座った。船長がしきりに船体横の通路をのぞき込んでいた。「どうしたんですか？」と尋ねてみると、「荷物が濡れないか確認しているのだけど、荷物は前に乗っているあれだけか？」と聞いてきた。これまでいくつものキャンプ客を乗せてきたということだが、群を抜いて荷物が少ないと褒められた。

古仁屋港を出港し、大島海峡を西に進む。加計呂麻の何か所かの小さな浜にも、いくつかテントがありキャンプを楽しんでいる姿が見られた。大島海峡は穏やかだったが、外洋に近づくにつれだんだんうねりが大きくなってきた。船首では、例年通り大坪先生がうねりと波しぶきに合わせ「きゃっきゃ」とはしゃいでいた（写真1）。3年前に、キャンプした江二屋離島を右手に見ながらさらに南下していく。途中、候補地の一つであった夕離島に立ち寄った（写真2）。波風の影響で西側にしか着岸できなかったのだが、岩場が続き潮だまりの影響でベースまで荷物の運搬が困難そうであったため、夕離島を後にし、次の候補地である須子茂離島を目指した（写真3）。



写真1 ヘルムからの眺め



写真2 夕離島視察



写真3 さらば夕離島

すぐに須子茂離島が姿を現した。日頃、グーグルマップの航空写真で計画や妄想を繰り返しているが、いつも想像以上に島は大きい。着岸できそうな浜に近づき品定めならぬ“島定め”を行った。須子茂離島の海と浜の奇麗さに満場一致で須子茂離島に決定した（写真4）。設営やライト吊り下げ用のロープを張り（写真5）、一段落したところで足元に「チクッ」と痛みを感じた。足の甲にでかいアブが止まっていた。それから背中や腕、浜で活動しているときはもちろんのこと、海でシュノーケリングをして頭

を上げたときなど頭に「チクッ」ときて須子茂離島にいた間は相当なストレスとなった。ダッフルバックからハエ・アブ用の蚊取り線香を取り出し、浜にあった竹でスタンドを作りチェアの両サイドに置き結界を張ることにした（写真6）。夜に酔っぱらって肘を火傷することになるとはこのときはまだ知らなかった。



写真4 須子茂離島到着



写真5 ベース設営



写真6 蚊取り線香

浜の前には大きな岩があり、潜ってみるとその周りにはたくさんの魚たちが泳いでいた。これだけいるのだから簡単に釣れるだろうと思い、そそくさと海から上がり、あまり人の禰で相撲を取る方ではないが、大谷先生から釣竿を借り、夕食のプラス一品を目指した。4～5投目には手ごたえがあり、引き上げようとしたが魚が水面まで見えたとき逃げられてしまった。水面から見えた魚はそんなにおいしそうではなかったので、釣り上げたところで可哀そうなことになるなと思い早々に釣りを切り上げた。

昼過ぎから夕方まで探索やテント設営に夢中になっていたが、ふと土踏まずの薄い皮膚がヒリヒリと痛いことに気づいた。土踏まずは砂浜でも「砂踏まず」のはずであってほしいが、人間が足を踏み入れない自然が作り出した柔らかく太陽光で熱せられた砂浜では、ザクザクと足が埋まっていき土踏まずに砂踏せ、薄い皮膚が軽い火傷とサンドブラスト状態になり痛くなっていた。所詮、アウトドア好きのインドアなのだなど足の砂を落としながら少し悲しくなった。足の裏は第二の心臓とも呼ばれるが、そこが痛くてなにもやる気が起きないでいたところ、ふと「戦場では常に清潔な靴下にしておくんだ」という言葉を思い出した。これは、私の好きな映画の一つである「フォレストガンプ一期一会」の中で、陸軍に入隊した主人公ガンプに、上官であるダン中尉が言った言葉である。そこで、試しに靴下を履いてみようと思った。今回はギョサンで全工程を過ごす予定で靴下は不要のはずだったが、奇跡的に一足の靴下がダッフルバックの中に入っていた。足に付着した砂をきれいに落とすのに苦労したが、履いてみるとすこぶる快適になり、ギョサンのときだけではなくマリンシューズを履く際にもシューズ内の砂が気になることもなく、浜はもちろんのこと海中も靴下を履きシュノーケリングを楽しむことができた（写真8）。

夕食後は、磯を散歩した。岩の波を受ける方にはハゼがびっちり張り付いて並びLEDライトに照らされキラキラと輝ききれいだった。陣笠、カメノテ、ハゼなどを捕まえてスープをとった（写真9）。いつも思うのだが、格好が亀の手に似ているから「カメノテ」という名前になったのだろうか、先にカメノテに名前が付いていたら今頃「亀」は何と呼ばれていたのか。「テガカメノテ」かな。いや、そもそも「カメ」は使えないから「シドニー・オペラハウス」あたりも視野に入れなければ…。とそんなニワトリが先か、タマゴが先かという問題に発展しそうな果てしないテーマに葛藤しながら眠りについた。しかし蒸し暑く寝苦しかった。昨年、テントを持たずブルーシートだけでキャンプをしようと計画していたことを今回実行すればよかったなと後悔した。



写真7 魚釣りに挑戦



写真8 靴下を履いた様子



写真9 貝の出汁スープ

2日目。太陽がテントの内幕に白い点となって表れ、だんだんと高くなっていく。寝不足気味だったので、もっと寝ていたかったがテント内の温度が容赦なく上がっていき、太陽に押し出されることになった。暑さと喉の渇き、そして昨夜の蒸し暑さでの寝不足で気怠かった。テントなどの片付けが終わり、とにかく迎えまでチェアで静かに寝て時間が過ぎるのを待とうと思った。日頃人間が快適に過ごすために冷蔵庫やクーラーなど沢山のエネルギーを消費しているのだなと反省しながら静かに目を瞑った(写真10)。

迎いの船が来て荷物を積み込んだ。昨日、船長の提案で帰りにハミヤ島に寄ってくれることになっていた。須子茂離島を出発し、すぐにハミヤ島の「白い三角」を遠く見る事ができた。だんだんとそれが大きくなっていく。やはりこちらも想像以上に大きい。浜まで50~60mほどのところで船が泊まった(写真11)。ここからは泳いで行かないといけならしい。大富先生が待ちきれず飛び込むのを横目に、飯山先生と船首にはしごを設置した。夏に「絶海 9000m」というパニック映画を鑑賞し、自力では海から船に上がれないことを私は知っていた。小中学生の頃は25mプールを泳ぐのがやっとであったが、大人になってみればできることが多々ある。しかし先日、公園に行った際に鉄棒で逆上がりにチャレンジしてみたが、これはまだできなかった。そのうちできるようになるのか。そんなことを考えながら浜まで泳いだ。浜に到着し、これまで各々3~4年間思い馳せていたハンミヤ島にやっと上陸でき、皆狂喜乱舞していた。砂丘の高さは、奄美高校の校舎がすっぽりはまるのではないかと思うくらい見上げる高さだ。しかし、浜を見渡すと狭かった。キャンプはもともとラテン語で平地や広場を意味する「カンパス」が語源となっており、平野で草を求めて野宿を繰り返す遊牧民の様子からきているようだ。しかし、これほどまでに狭小で丘陵な島でキャンプをしようと思っていたなんて皮肉なものとおかしくなった。キャンプをしたら一日中登って滑ってを繰り返し、遊んでやろうと意気込んでいたが、実際に砂丘を登ってみると、足がどんどん埋まっていき全然進まず、日ごろの運動不足も相まって1回登っただけでおなかいっぱいだった(写真12)。頂上から見た海のグラデーションと空の青さ浜の白さは、黒色の度付きゴーグルを通して素晴らしいものだった。



写真10



写真11 ハミヤ島



写真12 頂上付近

いつまでも眺めていたかったが、船長の指笛が鳴った。船に戻る合図だ。

ハミヤ島から古仁屋港までの帰りは、海上タクシー船長見習い2名の研修を兼ねていたらしく、加計呂麻島を東回りで古仁屋港を目指した。さまざまな見どころ（青の洞窟、潮吹き岩等）を案内してもらい充実した帰路となった。

これまで共に同じ島々を探訪し、意見や感想を述べ合いながら過ごす時間はとても楽しいもので、お互いの知識や教養を高め合うことができたと思う。まさに、「君子は文を以て友を会し、友を以て仁を輔く。」を体感できた2日間になった。